

南アルプス市立豊小学校前期自己評価書

令和5年9月15日（金）

1 前期自己評価の経過

- (1) 前期教職員自己評価及び児童対象アンケートの実施（7月）
- (2) 自己評価及びアンケート結果を基に職員会議にて状況分析と改善方策の検討（8月23日）
- (3) 学校関係者評価委員による自己評価書の検討（9月15日）

2 学校評価の分析と改善方策

はじめに

令和3年度より、橿形中学校区小中一貫教育推進のための取組として、学校評価においても質問項目を統一して行い、1中学校4小学校が足並みを揃えて目指す児童生徒像の実現に向けた取組を行っている。24の共通項目と豊小学校独自の質問項目2つ（項目番号⑭⑮）の26の項目についてアンケートを行い、教育活動の継続的な改善を図るものとする。

〔1〕評価基準

全体傾向を把握するため、4・【A】評価、3・【B】評価を肯定的評価とし、それらの合計が80%を超えている場合は『満足できる状態』と判断した。また、2・【C】評価、1・【D】評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は、『改善の余地がある状態』と判断した。

〔2〕全体的な傾向

上記の評価基準からすると、教職員による自己評価では、26項目のうち24の項目で【A】【B】評価の合計が90%以上の割合になっていて、比較的良好な状態であるということができる。また、評価の平均値を昨年度の前期と比較すると24項目はほぼ等しい値であったが、2項目においては値が下がっている。そして、否定的評価に目を向けると、11項目において【C】評価の回答があった。これらを総合的に判断すると、改善すべき状況がいくつかあるということができる。

児童アンケートにおいて【A】【B】評価の合計が80%を超えている項目は、17項目中15項目あり、その内、13項目で90%以上の肯定的評価で、全体的には良好な結果が得られている。【C】【D】評価に焦点を当ててみると、「⑧わたしは、家の人に学校のようすを話している」と「⑩わたしは授業中に自分の考えを伝えている」の2項目で20%を超えていて『改善の余地がある状態』であった。また、「⑬わたしは、本を読んでいる」についても肯定的評価は80%を超えてはいるが、【C】【D】評価の割合が他の項目に比べて高く、改善に向けた取組が必要であるとも考えられる

〔3〕結果の考察

(1) 学校経営・組織について（項目①～⑦）

教職員自己評価の項目①～⑦に関わって5項目において、肯定的評価が100%になっている。「③教職員間において報告・連絡・相談に努め、協力的な取組をしている」「⑤校務分掌で任された業務に積極的に取り組んでいる」については【A】評価が75%を超えており、教職員全員が一丸となって学校教育目標の実現に向かって学校運営に参画していると言えるだろう。

一方で、「②あなたは、PDCAのサイクルで、教育活動の向上に努めている」については【A】評価が32%であり、【C】評価が5%あった。新型コロナウイルス感染症が5類感染

症へ移行され、教育活動への規制も緩和された。文科省は移行後の学校教育活動の在り方について、「単にコロナ禍以前の姿に戻るのではなく、これまで制限されてきた学校教育活動のうち真に必要なものを回復させるとともに、GIGAスクール構想のもとで生み出されてきた多様な教育実践の工夫を取り入れることにより、いわば新しい学びのあり方へと進化を図っていくことが重要」との考えを示している。「真に必要なもの」を検証するためにも、コロナ禍以前の行事等の教育活動について、十分な検討やふり返りを行い、「新しい学びのあり方」を探っていきたい。

(2) 学習指導について (項目⑧～⑬等)

本校では、確かな学力を身につけた子どもを育てるために「豊小学校学びプラン」を作成し、学習規律や学習習慣の定着に取り組んでいる。また、児童間の関わり合いを基盤とし、学習プロセスや言語活動を重視した授業展開によって、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、学習指導要領で示される資質・能力の育成に取り組んでいる。

自己評価の結果を見ると、「⑧教材教具 (ICT機器を含む) を効果的に活用する」、「⑩授業のめあてを示している」と「⑬授業と有機的に結びついている家庭学習をさせている」については【A】評価が過半数を超えている

しかし、「⑪話し合い、討論、発表などの言語活動を効果的に取り入れている」と「⑫めあてを達成しているかを評価している」については【A】評価は半数に届かず、【C】評価もあった。⑪については児童アンケートの「⑪授業中に自分の考えを伝えている」の【A】評価が半数以下の結果とつながっているとも考えられる。

“山梨スタンダード”を意識した授業づくりや、校内研究で取り組んでいる授業の進め方を実践してきている成果として、「⑩授業のめあてを示している」の【A】評価80%につながっていると思われる。「めあて」を示すことで見通しを持った学習活動が進められる。学習内容をしっかり定着させるためにも「ふり返り」のなかで「めあて」の達成について評価させるという一連の流れが、どの学年でも行われ、今後も自ら学びに向かう姿勢を育んでいけるよう、2学期以降の校内研究会や普段の授業実践を通して、授業改善を図っていききたい。

児童アンケートを見てみると、「⑨わたしは、学校の授業がわかる。」の結果では、93%の児童が日々の学習を理解している様子がわかる。これは「⑩わたしは、自分の考えをもって、他の人の話を聞いている。」や「⑫わたしは家に帰ってから勉強をしている」の結果を反映しているものだと考えられる。昨年度の結果と比較すると、肯定的評価の割合も、評価の粗点も上がってきている。「学級力向上プロジェクト」や「家庭学習がんばろう週間」等の取組をPDCAサイクルの元、計画的に行っている成果であろう。

しかし、「⑪わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」の結果は、【C】【D】評価が20%を超えており、『改善の余地がある状態』であった。校内研究での、「Simple」プログラムや学級力向上プロジェクトの取組を通し、他者とのかかわりを大切にした学級づくりを進め、ペアやグループでの討議活動だけでなく、ICTを利用した意見交換等、「口頭で伝える」こと以外の「考えを伝える」方法や手段を取り入れ、児童の学習が深められるような工夫を行っていききたい。

(3) 生徒指導・生活指導について (項目⑭～⑱等)

生徒指導を充実させていくには、日頃から学級・学年経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係や児童相互の好ましい人間関係を育てることが大切である。

自己評価では、5項目とも肯定的評価が100%であった。特に「⑭児童理解のために、日頃から様々な方法でコミュニケーションを図っている」については【A】評価が89%と良好な結果が見られる。児童アンケートにおいて「④困ったことがあったら相談できる先生がいる」の【A】評価が90%を超える結果につながっていると思われる。

また児童アンケートにおいても、「①学校が楽しい」(94.7%)、「②学校のきまりを守っている」(92.5%)、「④困ったことがあったら相談できる先生がいる」(93.4%)、

「⑭自分からあいさつをしている」(93.4%)が肯定的評価であった。毎週水曜日、朝学習の時間に取り組んでいる「Simple」プログラム(自尊感情やソーシャルスキルを育む手立てとして名城大学の曾山教授が提唱するプログラム)や、年間5回の学級力アンケートを元に自分たちの学級を自己評価することを通して、日々の学習や遊びの中で計画的に取り組む仲間づくりの活動である学級力向上プロジェクトだけでなく、教職員が普段の生活のなかでも児童へ積極的に働きかけていることで、信頼関係を築き、規範意識を高めていることなどがそれぞれの肯定的評価につながっていると思われる。

一方で、「①学校が楽しい」の【C】【D】評価(5.3%)、「④困ったことがあったら相談できる先生がいる」の【C】【D】評価(9.2%)についてはきちんと受け止め、学習面や生活面で取り残されることがないように、児童理解や諸問題の早期発見・早期対応に努めていく必要がある。さらに、定期的に行っている、「いじめ対策委員会」や「特別支援校内委員会」を有機的に機能させ、児童の様々な諸課題について、チーム豊として全職員で指導支援していけるようこれからも努めていきたい。

携帯電話について行った児童アンケートでは、「⑰自分の携帯電話・スマートフォンを持っている。」児童は学校全体では42.7%(昨年度45%)であった。所有率を学年別にみると、1年生:33%、2年生:41%(1年時35%)、3年生:48%(2年時56%)、4年生:49%(3年時31%)、5年生:39%(4年時36%)、6年生:50%(5年時53%)、と学年が上がるにつれて所有率が高くなる傾向がある。所有している中で、ルールが決められている割合は77.3%と昨年度の同時期86.9%より低くなっている。学校では1学期に5学年で「スマホSNS出前授業」を、「豊地区教育を語る会」でも「ネットに潜む危険性」と題した講演会を行った。情報端末の利活用の仕方によっては児童の生活や健康への影響が懸念されることについて、改めて考えるきっかけとなった。また一人一台端末を利用する際の約束を確認するなど、機会があるごとに情報モラル教育に力を入れている。教職員はさらに指導力を高めていくとともに、家庭への啓発も引き続き行っていく必要がある。

楡形中学校区すべての小中学校で取り組んでいる、楡形スタンダードの項目に掲げた内容について児童アンケートの結果を見ると、「⑦わたしはげた箱のくつをそろえている」、「⑭わたしは自分からあいさつをしている」において、【A】【B】評価の割合が90%を超えていた。「楡形スタンダード」にもとづき、児童会活動、学年学級で継続して取り組んできている成果である。

「⑥わたしは、無言清掃をしている」においても、肯定的評価が91.6%と『満足できる状態』ではあるが、【A】評価である「しっかりやっている」の割合が45.4%と半数を割り、他の項目と比べて低かった。1学期には児童会本部と6年生が中心となって、児童会活動の柱の一つである、「無言でピカピカ清掃作戦」を実施したが、今後も児童による自主的な取組を通して、意識を高めていきたい。

(4) 保護者・地域との連携について(項目⑱⑲等)

保護者との連携を保っていくには、学校からの情報発信はなくてはならない。児童の学校での様子を知らせることや教師の思いを伝え共感してもらえることで協力が得られる。

「⑱おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報している」については、昨年度より平均値が上がり改善傾向がみられる。学年だより、学級だより等で児童の活動の様子等を知らせてもらっているが、通信やホームページの原稿作成が業務負担にならない様、紙面を工夫(写真やイラスト等で文字数を減らす、事実を書き綴る)し、ホームページにもその一部を載せるなどして、広く学校教育活動を知らせていきたい。

また、「⑲地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っている」については【A】評価が30%に届かず昨年度より平均値も低くなっていた。感染症対策から地域人材や資源の活用を制限していた期間があり、「地域の教育力」が見えにくくなっているとも考えられる。地域に開かれた学校を目指し、未来の創り手となるために必要な力を児童が育んでいけるよう、「真に必要なもの」を見極めながら、学校・家庭・地域が連携し、

実践を積み重ねていきたい。

(5) 小中一貫教育について (項目⑳～㉓等)

令和4年度に橿形地区の小中学校5校は“橿形中学校区小中一貫校”として新たなスタートを切った。それぞれの学校が特色を生かしながらも一貫校として共通の理解を図りながら児童生徒を育成することをねらいとし、いくつかの共通項目を設けている。

「㉑対話を意識した学び合い」, 「㉒課題や発問の工夫」 「㉓Simple プログラムの指導」の3項目とも、肯定的評価は90%を超えていた。これらは校内研究会でも研究を進めているが、小中一貫教育合同研究会でも取り組んでいる項目である。10月には「Simple」プログラムの提唱者である名城大学教授・曾山和彦先生に本校の実践を参観し指導を頂く機会を設けたり、橿形中学校区の授業研究会に参加したりする予定である。他校からも学び、児童生徒の人間関係づくりを充実させながら、授業力向上(授業改善)を図っていききたい。

(6) その他

「㉔民主的で規律ある学級(学年・学校)集団作りを行っている」と「㉕諸表簿や文書、記録媒体を適切に管理・活用している」の2項目は肯定的評価が100%であった。校内研究で取り組んでいる「学級力向上プロジェクト」や「豊小学校学びプラン」等を基にこれからも、豊小学校としての集団作りを行っていききたい。また、「リモート接続」の活用や県の「校務支援システム」導入から、機微情報についてのセキュリティが高められた。

「データ情報」の管理とともに、プリントやノート等の「紙媒体」での情報管理をこれからも適切に行っていききたい。

昨年度から新たに設けた「㉖働き方改革を意識して、積極的に業務改善に取り組んでいる」については肯定的評価が86%であったが、【A】評価は17%であった。意見にも出されていたが、教育活動等の制限がなくなり、行事の復活だけでなく、会議や研修が紙面やリモートから参集型となり、行事予定を見ただけでも多忙化が感じられてしまう。「学校経営・学校運営への参画」のところでも述べたが、「単にコロナ禍以前の姿」に戻るのではなく、「真に必要なものを回復させ」、「新しい学びのあり方」や行事や業務内容をきちんと精選し、全員で精査する取組を進めていく必要がある。